亜弾性構成則に基づく Cam-clay model の陰的応力更新アルゴリズムの構築

東北大学工学部	学生員	○小松 龍ノ介
東北大学大学院工学研究科	正 員	山田 正太郎
東北大学大学院工学研究科	正 員	京谷 孝史
東北大学大学院工学研究科	正 員	松原 成志朗
東北大学大学院工学研究科	学生員	劉暁東

1. はじめに

弾塑性構成則に適用されるリターンマッピングアル ゴリズムは、超弾性構成則の使用を前提に構築される ことが多い.一方で微小変形理論に基づいて提案され た元来の Cam-clay model は弾性成分に圧力依存型の亜 弾性構成則を採用する.そこで、本研究では亜弾性構 成則を使用する修正 Cam-clay model を対象にリターン マッピングアルゴリズムを構築すると共に、同アルゴ リズムに整合する接線係数を導出する.加えて、構築 したアルゴリズムが適切に機能するか検証を行う.

2. Cam-clay model の陰的応力更新アルゴリズム

2.1. Cam-clay model の基本式

本研究で対象とする Cam-clay model の基本式は、応 カとひずみをそれぞれ圧縮を正として、以下のように 定式化される.

$$\dot{\boldsymbol{\varepsilon}} = \dot{\boldsymbol{\varepsilon}}^e + \dot{\boldsymbol{\varepsilon}}^p \tag{1}$$

$$\dot{\boldsymbol{\sigma}} = \mathbb{C}^e : \dot{\boldsymbol{\varepsilon}}^e = \left(\tilde{K} - \frac{2}{3}\tilde{G}\right)(\operatorname{tr} \dot{\boldsymbol{\varepsilon}}^e)\boldsymbol{I} + 2\tilde{G}\dot{\boldsymbol{\varepsilon}}^e \tag{2}$$

$$F = f(p,\eta) - \varepsilon_{\nu}^{p} = 0$$
(3)

$$f(p,\eta) = \mathrm{MD}\ln\left(\frac{p}{p_{c0}}\right) + \mathrm{MD}\ln\left(\frac{\mathrm{M}^2 + \eta^2}{\mathrm{M}^2}\right)$$
(4)

$$\dot{\boldsymbol{\varepsilon}}^{p} = \dot{\Lambda} \frac{\partial f(p,\eta)}{\partial \boldsymbol{\sigma}} \tag{5}$$

式(1)はひずみ速度の加算分解式,式(2)は弾性構 成則,式(3)と(4)は降伏関数,式(5)は関連流れ則である. σ , p, q, η をそれぞれ有効応力,平均有効応力,軸差 応力,応力比(q/p)を表す. ε_v^p は塑性体積ひずみ, M は限界状態定数, Dはダイレイタンシー係数, p_{c0} は初 期降伏曲面の大きさ, $\dot{\varepsilon}^e$, $\dot{\varepsilon}^p$ はそれぞれ弾性及び塑性 ひずみ速度, Å は塑性乗数である.体積弾性係数 \tilde{K} と せん断弾性係数 \tilde{K} , ひいては弾性係数テンソル C^e は平 均有効応力に比例する.

2.2. リターンマッピングアルゴリズム

各式に含まれる速さを増分に置き換えるとともに、 式(2)と(5)を後退差分近似する.加えて $\Delta \dot{\epsilon}^{p}$ を消 去することにより、 $\Delta \epsilon$ 及びnステップでの各値を既知 としてn+1ステップ未知変数 $[\sigma_{n+1}, \Delta \Lambda_{n+1}]$ が満たすべ き方程式を次の式(6)と(7)のように設定する.

$$\begin{cases} \boldsymbol{N}_{n+1} = \boldsymbol{\sigma}_{n+1} - \boldsymbol{\sigma}_n - \mathbb{C}_{n+1}^e : \left(\Delta \boldsymbol{\varepsilon}_{n+1} - \Delta \Lambda_{n+1} \frac{\partial f(\boldsymbol{\sigma}_{n+1})}{\partial \boldsymbol{\sigma}_{n+1}} \right) = \boldsymbol{0} \quad (6) \\ F_{n+1} = f(\boldsymbol{\sigma}_{n+1}) - \boldsymbol{\varepsilon}_{\nu n}^p - \Delta \Lambda_{n+1} \boldsymbol{I} : \frac{\partial f(\boldsymbol{\sigma}_{n+1})}{\partial \boldsymbol{\sigma}_{n+1}} = \boldsymbol{0} \quad (7) \end{cases}$$

試行弾性計算を行い、塑性と判断される場合には、 式(6)と(7)を満たすように Newton-Raphson 法により 塑性修正計算を行う.式(6)と(7)の線形化方程式から 得られる $\Delta \Lambda_{n+1} \ge \sigma_{n+1}$ の修正量は式(8)、(9)のように表 される.

$$\begin{cases} \delta(\Delta\Lambda) = \frac{F_{n+1}^{(k)} - \left(\partial_{\sigma} f_{n+1}^{*(k)}\right) : \tilde{\mathbb{C}}_{n+1}^{e(k)} : N_{n+1}^{(k)}}{\left(\partial_{\sigma} f_{n+1}^{*(k)}\right) : \tilde{\mathbb{C}}_{n+1}^{e^{*(k)}} : \left(\partial_{\sigma} f_{n+1}^{(k)}\right) + \mathbf{I} : \partial_{\sigma} f_{n+1}^{(k)}} \\ \delta\boldsymbol{\sigma} = -\tilde{\mathbb{C}}_{n+1}^{e^{*(k)}} : \left[\mathbb{C}_{n+1}^{e(k)-1} : N_{n+1}^{(k)} + \left(\partial_{\sigma} f_{n+1}^{(k)}\right) \delta(\Delta\Lambda)\right] \end{cases}$$
(8)

2.3. Consistent 接線係数

式(6)と(7)を現在の $\Delta \epsilon$ まわりに線形化し整理することにより、上記の陰的応力更新アルゴリズムに整合する接線係数 $\tilde{\mathbb{C}}_{n+1}^{ep}$ が以下のように導出される.

$$\tilde{\mathbb{C}}_{n+1}^{ep} = \tilde{\mathbb{C}}_{n+1}^{e} - \frac{\tilde{\mathbb{C}}_{n+1}^{e} : \partial_{\sigma} f_{n+1} \otimes \tilde{\mathbb{C}}_{n+1}^{e} : \left(\partial_{\sigma} \tilde{f}_{n+1}\right)}{\left(\partial_{\sigma} \tilde{f}_{n+1}\right) : \tilde{\mathbb{C}}_{n+1}^{e} : \partial_{\sigma} f_{n+1} + \boldsymbol{I} : \partial_{\sigma} f_{n+1}}$$
(10)

ここに,

$$\widetilde{\mathbb{C}}_{n+1}^{e} = \left[\mathbb{I} - \partial_{\sigma} \mathbb{C}_{n+1*}^{e^{*}} (\Delta \boldsymbol{\varepsilon}_{n+1} - \Delta \Lambda_{n+1} \partial_{\sigma} f_{n+1}) + \Delta \Lambda_{n+1} \partial_{\sigma\sigma} f_{n+1}\right]^{-1} : \mathbb{C}_{n+1}^{e} \tag{11}$$

$$\begin{bmatrix} \partial_{\sigma} \mathbb{C}_{n+1*}^{e} (\Delta \boldsymbol{\varepsilon}_{n+1}^{(k)} - \Delta \Lambda_{n+1}^{(k)} \partial_{\sigma} f_{n+1}^{(k)}) \end{bmatrix}_{ijkl}$$

$$= ([\partial \mathbb{C}_{n+1}^{e}]_{ijpq} / \partial \sigma_{kl}) (\Delta \boldsymbol{\varepsilon}_{n+1}^{(k)} - \Delta \Lambda_{n+1}^{(k)} \partial_{\sigma} f_{n+1}^{(k)})_{pq}$$

$$(12)$$

キーワード Cam-clay model, 亜弾性, リターンマッピング, 整合接線係数 連絡先 〒980-8579 仙台市青葉区荒巻字青葉 6-6-06 TEL 022-795-7126

$$\partial_{\sigma} \tilde{f}_{n+1} = \partial_{\sigma} f_{n+1} - \Delta \Lambda_{n+1} \boldsymbol{I} : \partial_{\sigma\sigma} f_{n+1}$$
(13)

である. ただし、Iは4階の恒等テンソルであり、 $\partial_{\sigma}(\bullet) = \partial(\bullet)/\partial\sigma$ 、 $\partial_{\sigma\sigma}(\bullet) = \partial^{2}(\bullet)/\partial\sigma\partial\sigma$ である.

3. 数値解析による検証

3.1. 陰的応力更新アルゴリズムの検証

前述のリターンマッピングアルゴリズムについて検 証するために、単純せん断変形を示す一様変形場にお けるモデルの応答を計算した.表1に計算に用いた材 料定数を示す.

表1 材料定数		
正規圧密線の切片 N	3.0	
限界状態定数 M	1.5	
圧縮指数 <i>Ĩ</i>	0.25	
膨潤指数 <i>ĸ</i>	0.045	
ポアソン比 <i>v</i>	0.3	

図1と図2に、ほぼ正規圧密土と過圧密土に対する 計算例をそれぞれ示す. せん断ひずみ *εs* を 1%与える のに要するステップ数を 100,10 に変化させて計算を行った. *p*-*q* 関係を表す図中には、非排水せん断時の 有効応力経路の理論値も示す. 計算値はこの理論値に ほぼ合う結果を示している. また、計算値が最終的に 限界状態線に到達していることを確認できる. 図2よ り軟化を生じる場合でも正しく負荷判定が行えている ことが分かる. 増分の取り方が解析結果に大きな影響 を与えていないことが分かる. 以上の結果から陰的応 力更新アルゴリズムが適切に機能することが確かめら れた.

4. 結論

本稿では、圧力依存型の亜弾性構成則に基づく Cam-clay model の陰的応力更新アルゴリズムとそのア ルゴリズムに整合する接線係数を導出した.また、導 出した陰的応力更新アルゴリズムが適切に機能するこ とを確認することができた.







図2 過圧密土の応答